



アイヌ文様 No.1

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 錦谷, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001726

アイヌ文様 No. 1

錦 谷 正

北海道教育大学釧路分校デザイン教室

Tadashi NISHIKIYA: Ainu Pattern No. 1

未開の人種といわれ、原始的と見られているアイヌの人達の文様は文様史の系統上、極めて特異なものとして見られている。今、その始源や構成を他の文様と比較研究して明らかにできるならば、従前の工芸史や美術史などがない、新しいデザイン史の体系をくみだてていく段階での一頁になると考える。

またアイヌ文様の発生や独自の様式は、何時、何処で、どの様な形で作られてきたのか不明であるが、それについての考究は、創造性とか独創力といわれるものの追求に大きな手がかりになるとも考えられる。

1. アイヌ衣服の文様（アイヌ絵や文献などに見られる）

アイヌ文様のように原始的、未開的な人たちの文様については、次のように区分している人が多い。

- イ) 単なる装飾的な意図によるもの。
- ロ) その社会に特有な記号、または宗教的な象徴を表現したもの。

アイヌ文様について、これがこのままあてはまるかどうかは、これからの解明にまたなければならぬ。次に、アイヌ文様は手法的には3つに分けられる。

- イ) 刺 繡……衣服、装身具など
- ロ) 彫 刻……刀による彫刻（Ikupasui、一般にひげべら）
- ハ) 編込み……Emshiatu （一般には刀綬といわれる）

Titarube （飾り莫産）等

これらが文様の付されているものとして挙げられ、そのうち刺繡や編込みなどのように平面的なものは女子の仕事であり、彫刻など立体的なものは男子のつくりものと見られている。これを男文様 Inue 女文様 Ikarukaru と呼称している。

◦ アイヌ衣服について

古い時代のアイヌ衣服¹⁾は専ら獣皮を利用したものと思われるが、その外、鳥皮、魚皮、草皮が用いられている。

獣皮衣 = Katutimiku または Uri （熊、鹿、犬、狐、あざらし等）

鳥皮衣=Rapuru (鴨, 鶉, 阿呆鳥)

魚皮衣=Tikapuuri または Tiepuuri (鮭, イトウ)

草皮=Kera (ムリツ, てんき草)

これが江戸時代も後半になってくると、木綿、絹などが割合入手し易くなり、これらの木綿、絹などが衣服の材料や装飾に用いられるようになってきた。

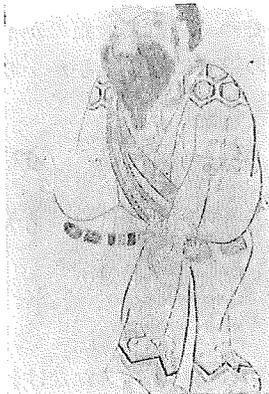
但し、昭和43年7月16日函館市海苔町で古銭(渡来銭)を入れた甕が出土したが、これには罅割れからの水漏れを防ぐのに両面から大きな布片を当てて、その上から漆を接着して防水をしている。

材質や染色の有無、またその布片は北海道に甕が渡る前のものか、後かは不明であるが、甕そのものは室町前期の越前窯三期と呼ばれる石川県で作られたものなので、布片そのものも、その時期のものと考えてよいと思われる。

また衣服以外であるが、編物で網走管内斜里町で縄文時代後期のものと思われるものが出土したことがあるが、現存のアツン類で古いものは百年ぐらい前のものと思われるものしか残っていない。従って明言は出来ないが、アツンなどに付されているアイヌ文様は徳川時代の後期には盛んであったと思われるが、文様そのものは、それ以前の時代にも遡ることが出来ると思われる。

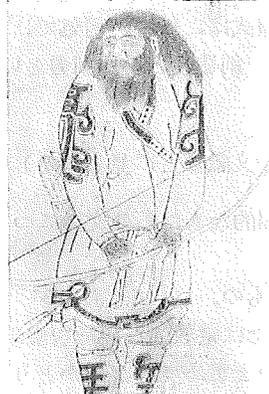
・アイヌ絵に見られる古い文様

「えぞ人物図」



第1図「えぞ人物図」I712
(正徳2年)壬辰三月下旬写之 題不明「蝦夷誌」付図といわれる。在東京大学 人類学教室(図説 日本文化史大系 p. 94)

「蝦夷風土記」全所載の男女の図



第2図(A) アイヌ(男)像
1797(寛政9年)新井質著(朱書)壺津新山 質葛西因是ナリ



第2図(B) アイヌ(女)像
1797(寛政9年)大和綴真名体 朱書本 蔵、著者

この人物像の衣服文様を見ると、忠実に写生されたものか、省筆されたものか明らかでないが、アイウシヤモレウ文を主体とした現存のアイヌ文様とは隔りがありすぎるし、山丹錦(蝦夷錦)などの文様にも見ることがない。

即ち、肩部は亀甲文らしき文様、襟は幾何形のジグザク文、袖の中ほどには、つる草か唐草よりの文様が、とげのある十字形の間、間に展開している。裾は波形よりの文様の下側に、これも雷文か波形に見える、ジグザク線がある。

図の(A)はアイヌの男子、(B)は女子の図と思われるが、これは巻末近くに所載されている4人の

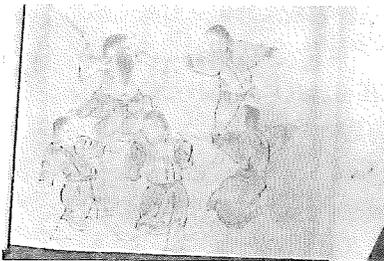
人物像のうちのもので（他の2人は中国人または韃靼人と思われ、弁髪を有する）「えぞ人物」より80年程あとのものである。男子の絵像では衣服の襟、肩より袖の上部、裾及び脚絆に文様が見える。省筆されているが、現存のアイヌ文様に近い。但し裾が短いのは戦闘もしくは狩獵のためだろうか、女子も裾短かであるが、肩部の文様から切伏せ方の残片が垂れ下っているように見える。また男子の左袴に対し、あわせ衿が筒胴のように見える「風土遊覧集」所載図より、この



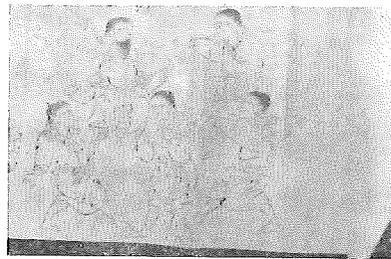
第3図 アイヌ群舞 1756(宝暦6年)
二階堂休翁 蔵北海道大学付
属図書館

絵と同じ図柄のものが、北大図書館に第4図(A), (B), (C), の3図, その外、越崎宗一の「アイヌ絵」第4図の「蝦夷国風図絵」のうちの1つ(第4図(D)), と併せて5つの絵図が見られる。

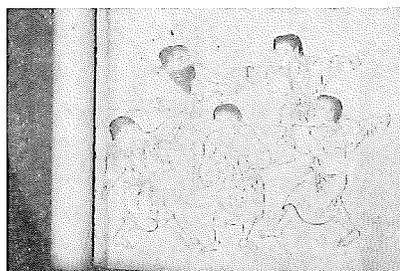
模写、転写の類が多いが、原本と見られる絵は神戸から函館市立図書館が入手した小玉貞良²⁾のものらしい。3図及び4図の(A), (D), は貞良の筆跡に似ているが、このうち3図は4図(D)より古いと見られるが(蝦夷風俗画高倉新一郎及び蝦夷往来12号), つまり、アイヌの酋長らが松前藩主に謁見の



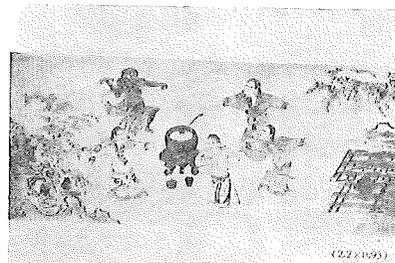
第4図(A) アイヌ群舞(模写図) 風土
遊覧集または蝦夷国風図絵 蔵北
大図書館



第4図(B)



第4図(C)



第4図(D) アイヌ群舞(模写図) 蝦夷
国風図絵 伝写本 蔵函館市立図
書館「アイヌ絵」4図

際始めは座敷で後、藩主の権威が高くなってからは城外でした。「風土遊覧集」では座敷での謁見であるから古いとのことであるが、この図では第4図(D)の方がより古く見える。ともあれ、第3図、中央手前の女夷が着ている衣服の文様は花形で衣服全体についている。「蝦夷島記」では、これを「五色の継裁を花形、色々の紋を切縫付」と表現)、これに対し第4図(D)(函館市立図書館蔵)の絵では中央手前の女夷の衣服に文様はついていなく代って、左手前の女夷の衣服の肩、臂、袖口、衿、腰、

裾廻り等に文様が付されている。肩は渦文らしく見え、臂は花形文で中央から紐状のものが垂れている。腰部は Uren moreu か鑲文様らしいもので、現存の文様とは大部違って見える。

4 図(A)は衣服の上にキ、白などと記入しているので彩色前のものと思われるが、中央手前の女夷はカスリらしい文様、左手前の女子は肩が Uren moreu で肘、腰の文様が「母子の図」⁹⁾の母の衣服の文様と同じく花形文の中央から紐状のものを垂したものである。この中では3 図及び4 図(D)が比較的古いと思われる。それは省筆の少ない点、筆法の確実な点から押して、貞良もしくは、それに近い人の作と考えられる。

尚、前記に挙げた文様の有様については Girolamo de Angelis の見た「十字形またはバラの花形」(アイヌ民族誌 p. 43)と云う記述の文様表現の様子をあらわしたものと相応すると考えられる。貞良については註2で述べたように狩野朋信と見る人もあるようにアイヌ絵の巧者であり、そのためにはアイヌを一層引き立たせるために、画くに、一帳羅の晴衣をつけさせた。例えば釣をするのに蝦夷錦(晴衣)を着てするものはない筈であるが、貞良画く「釣りするアイヌ」はそれを着ている。従って前述の夷女の文様もおそらく蝦夷錦の地文の上に更に地文に似た文様を刺繡したか、切伏せしたかしてことさら派手に表現したものらしい。(特殊な階級の特殊な文様で一般アイヌの文様でない)貞良が描く人物の描写の特徴とあいまって、概して酋長やその家族を描いたものが多いのを考えると、そのことが肯定できると思う。従って高倉新一郎先生が北方文化研究報告8 輯での「蝦夷凡俗画について」p. 11 の(……今日とは派手で、模様も違ってみたらしく、蝦夷凡俗の変化を示してあるものと考へられるが、松前江差屏風に描かれた蝦夷図筆から考へて、後世の「アツシ」模様の誇大化であり、……)と云う御見解には賛成できない。

また、この文様の付されている衣服をきたアイヌの人たちは前にも述べたように一部の上流のアイヌの人たちであり、そのため殊更に派手に美しく装っていたのが外来者の目にとまったものとするのが妥当であろうし、一般のアイヌの人たちの衣服の文様ではない。

尚これらの文様と類似する衣服を着ている絵としては、

・熊狩 (絵馬)	青森市広田神社蔵	小玉 貞良	越崎 宗一	1945 (昭和20年)	「アイヌ絵」	(1)図
・蝦夷人物図	小樽市松田三吉蔵	〃	〃	〃	〃	(2)図
・章魚突之図	越崎宗一蔵	〃	〃	〃	〃	(3)図
・蝦夷漁父図	北大図書館蔵	松溪谷保古	〃	〃	〃	(7)図 (同書には6 図 (134) 図
・Ukar (蝦夷国風図絵)	市立函館図書館蔵	小玉 貞良	泉 靖一編	1963	「アイヌの世界」	(135) 図
・母と子 古代蝦夷風俗之図	北大図書館蔵	作者不明? 小玉貞良と思う		1963 1965	〃 北大図書館で筆写する	
・酒宴 (蝦夷国風図絵)	函館図書館蔵	小玉 貞良 高倉新一郎 と思う	北方文化研究8 輯	1953	「蝦夷風俗画について」	3 図

等、多くあるが、総じて小玉貞良及びその門下生の作品と見られるもので、特に「アイヌ絵」p. 15 (H)衣服として、(男の衣服は黒色であるがよく見ると雲形地文が一面に描かれている。所々大きく雲形とも花形ともつかぬ模様の緑、赤、白より成る刺繡が施されていて、生地は地文のある点から見て絹らしい。)これは貞良筆の「章魚之図」の解説であるが、これは前述の花形文や雲形文に対する私見と相応するものである。

第5 図は北大付属図書館(北方文化資料室)で撮影したものである。「アイヌ絵」7 図(図版目次では6 図)また3 図「章魚突之図」では不鮮明でよく見えなかった黒色衣服の黒色雲形地文がこれで明白に表現されている。

つぎに、これらの文様とも異なり亀甲文⁴⁾をつけた絵があり珍しい。「男女之図」苫小牧市立図



第5図 蝦夷漁父図 年代不明 松溪谷保古筆 蔵北大図書館 筆者写（アイヌ絵）6図にもある。

書館蔵巴江山人 また、泉 靖一編「アイヌの世界」第47図 では子供を背負ったアイヌ婦人が樹皮を割いて繊維をつくっている図であるが、この婦人の衣服文様が亀甲文である。これと全く同じ図柄で越崎宗一の「アイヌ絵」第47図に平沢屏山筆の「蝦夷風俗図」（横瀬、北大蔵）がある。この絵は繊維を作る代りに熊の仔に哺乳しているように見える。亀甲文は明らかでない。巴江は屏山の弟子であり、屏山に及ばないにしても、亀甲文様を表現したのは面白いが、多分、内地より輸入された小袖などに付していたものと考えられる。

以上アイヌ絵に見られるアイヌ文様を勘考すると、最も古いアイヌ絵の画家といわれる小玉貞良のものは上流階級のアイヌを好んで描き、一見現存の文様と異なっているように見えるが、それは前述のように晴衣としての山丹錦などの文様の殊更つよくあらわしたものと考えるし、かりに切伏せしたとしても、地文に類似

した雲形文または花形文を付したものとする。

第1図の「えぞ人物図」については全く不可解な施文であるが、新井白石著の蝦夷誌⁵⁾の附図と見るならば、実際にアイヌを見聞しての著作と思われるので附図も同じく、資料を見て推定して作画したのではないかと考える。註4で述べたように近世日本の内地では亀甲文が多く使用されたことと考へ併せると、このような推定も考えられるのではないだろうか。

。文章で記録された文様

北遊記（文化4年、1807年）三巻一水戸人秋葉友右衛門、奥谷新五郎の著した一節に「この地の大畑村では白木綿の切にて背の中または裾などを亀甲またはまん字形あるいは罫の如く、形を縫って着る人まあまり……」と述べてあるが、これに対し、金田一京助先生は『アイヌ研究』（大正14年八州書房）の中で、この白木綿の切伏文様はアイヌの土俗で今もやっているチキリベ（これは日高アイヌのチカルカルベまたは一般的にいうカパラミプのことらしい。）というものがそれであるといわれている。背中や袖、裾などに見られる文様は Ara Shicke Unu Moreu や Uren Shicke Unu Moreu（角形片巻文様や角形両巻文様）と見られるが、亀甲文については前に述べたように切伏せしたとは考えられない。矢張り和人から手に入った衣服に染められていた文様とみたい。

。ユーカラに見られる文様

「アイヌ服飾文様の起源に関する一考察」北方文化研究報告19輯昭和39年鷹部屋福平 や「アイヌ民族誌」p. 220 ではユーカラ集II 68～78 金田一京助より引用して、『きらびやかな渦文』とか『金色の小渦文』とか『姉がつけたる刺繍が麗しき繡衣』などと Moreu を渦文として述べているし、その外おそらく繡衣としては Aiushi 文などもあるだろうが、この様にユーカラの上に表現されている。

ユーカラそのものについては詳しくはわからないが、その伝誦されてきた経過を考えるに相当古い時代まで遡ることができるのではないと思う。もし、それが事実だとすると渦文と訳している Moreu の発生も大変古い時代から施文されていたということが理解されるのであるが、そのためにはユーカラの歴史的な位置付けを明確にする必要がある。

。外人の見聞したアイヌ文様

外国人がアイヌについて見聞した調査記録については、児玉博士が「アイヌ民族誌」上 p. 42～

p. 62 に30名について紹介されている。

この中から文様についてのみ抜き書き一覧表にした。

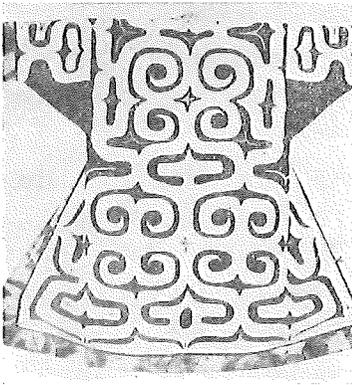
第6図 外国人の見聞したアイヌ衣服の文様一覧表 アイヌ民族誌 (p. 42~62) 抜萃

氏名	年代	場所	文様及び衣服材料, 色	文献
• Girolamo de Angelis	1622 元和8年(秀忠)	松前蝦夷	• 多くの刺繍 ・ 十字またはバラの花形 • 衣服は長く, 絹, 木綿衣, アツン	第二蝦夷国報告 (1621)
• Diogo Carvalho	1620 元和6年(秀忠)	松前蝦夷	• 衣服に同じ布片で縫いこんだ種々の刺繍 • 寒いときは内側を毛にした毛皮衣 • 丈がながく, 袖はシャツ状, 前が開いているのは帯をしめる • 文様は十字形が多い	蝦夷報告書 (1620)
• Maerten Vries	1964 寛政20年(家光)	十勝 クナシリ北岸 アニワ湾 タマリ部落 タライカ湾	• アツンの粗衣, その上を毛皮衣 • 全部毛皮衣 • 男の庶民は晒されない樹皮衣に赤や青で刺繍したもの, ときには毛皮衣, 裕福者は紺色の木綿衣(単衣)に種々な色糸で刺繍したものの文様は輪形または十字形 • 女子は刺繍した木綿衣, 樹皮衣または毛皮衣 • 従者は毛皮衣, 裕福な人は刺繍のある木綿衣または絹, 毛皮の輪状帽	航海日誌
• Stepham Krascheninikoff • Georg Wilhelm Steller	1740 元文5年(吉宗)	カムチャッカ島 シムンリ島 シリンキ島 オンネコタン島	• 海鳥, きつね, 海獣の皮でつくる。これは種々の皮をはぎあわせたもので同じ材料でつくることは稀 • 毛織物や絹の布, ことに赤色でつくった衣服を入手することをほこる	クリル人に関する調査書 (1770)
• Mnrtin Spanberg	1738~39 元文3年(吉宗)	国後島 蝦夷島北部	• 千島住民と似た人間で長い衣服をまとい股引をはいていない。跣足 • カムチャッカ人のように種々な色彩の布片をつけている	エス・エリ・ベルグ小場有米訳「カムチャッカ発見とベーリング探検」昭和17年
• J. F. G. La pérouse	1787 天明7年(家斉)	樺太 クシエンナイ湾	• 樹皮作りの衣服 • 模様のある木綿衣	21人のアイヌから聞く (1798)
• William Robert Broughton	1796 寛政8年(家斉)	噴火湾	• 男の衣服はしなのきの内皮で織った弛い膝の下までぐらいの長衣で衿と袖口は青い麻布で縁取りされてある • 女の衣服は男とあんまりちがわなない。ただし長く下腿の半ばぐらいまで達するぐらい。中にはあざらしやしかの皮で作られ, 青い裂で切伏せされたものもある	A Voyage discovery to the North Pacific Ocean (1804) London
• Adam Johana von Krusenstern	1805 文化2年(家斉)	ソーヤ岬とその湾 アニワ湾	• アイノの衣服はいぬまたはあざらしの毛皮で作るアニワ湾ではすべて毛皮, 長靴もあざらしの皮女もあざらしの毛皮 • ソーヤ湾では毛皮は2人(くま, あざらし)他は樹皮で織った黄色の粗い地のものをきたこの上衣の下に一枚のうすい木綿地のものをきた • わらの長ぐつ • 中には衣服に青い布で縁が縫いとってあった	1803~1813

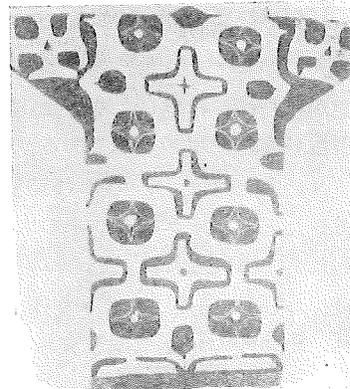
これによると、

1. アイヌの衣服は徳川時代初期、主に毛皮衣を着ていたし、その毛皮でも、なかには青い布片で縁取ったり、刺繡をしていたらしい。
2. アツシのような晒されない樹皮衣に赤や青で刺繡していた。
3. 樺太ではいらくさ、つるうめもどきの繊維で織った衣服があったこと。（北海道ではおひようだもなどで織ったアツシ）
4. 色は青が主で赤やその他若干の色糸や布が手に入ったと思われるが、紺色木綿が一番入手し易かったものと思われる。
5. 酋長や、その家族などは山丹錦ややわらかい韃靼渡来の衣服及び日本内地から入手した小袖、内掛け、陳羽織などを晴衣として着ていたらしい。
6. 文様の多くは、モレウやアイウシの切伏せ刺繡などであり、昔は現存の衣服文様より布片が貴重であったため、尚さら大切に切伏せしたと思われるし、主として背中の中の文様及び袖、衿、裾まわりに施文したと思うが、外人の見聞記にはバラ形または十字形とある。

十字形は外人の生活環境から来る視認度の差異であって、7図のようにモレウ文の発展やモレウ文とモレウ文のつながぎを主として目にとどめた結果、十字形の文様という記述になったものと考えられる。（Positive Negative）



第7図(A) アイヌ絵や文献に見られるアイヌ文様



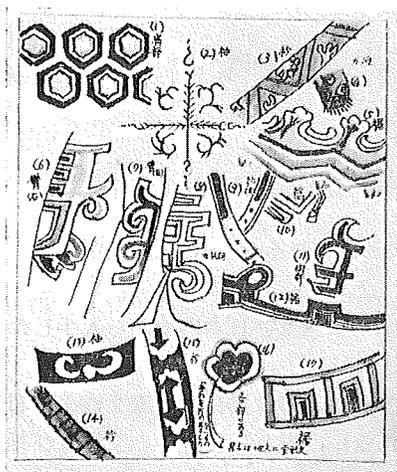
第7図(B)

7図(A)の中央部にある十字形らしきものは上部のモレウ文と下部のモレウ文とをつなぐ役目をするが、あたかも Honeysuckle の茎部のようにも見える。Uren shickunu moreu の連絡する中間の陣間をふさぐ形で十字形に見えるのは7図(B)である。アイヌの人たちには、その信仰からしてキリスト教はないので、従って十字架まがいの十字形を意識しての表現ではあり得ない。バラ形の表現についてはすでに前に述べた通りである。

・アイヌ絵や文献に見られる文様についての総括

7図(B)については既に説明したものであるが（1～5）までは新井白石の「蝦夷誌」附図といわれるもので、これについては飽迄も資料による推定された文様構成と考えた。（6～12）までは「蝦夷風土記」の挿図で、これは現存のアイヌ文様が省筆されたものと考えられるが、若干の差異は見られる。

（13～17）までの文様は最古のアイヌ絵画と見られる小玉貞良若しくは、その一門のもの絵



第7図(C)

赤=樺の木の皮に熱湯を注ぎ暫時にしてこれを揉む、かくして得た赤色の汁はそのまま赤の染色として用いる。蝦夷風土記には赤=Raure 白=Retarupe 黒=Kunne 黄=Sten の4色を挙げている。

山丹交易や内地交易によって種々の色系は入手出来たと思うが、量は極く少量であったろうし、そのため貴重品だったろうと思う。

ともあれ外人の記録で360年、即、徳川時代初期より、和人の見聞では、それより百年近く遅れ、吉宗の辺から文様が出現してくる。やゝ詳しく言えば二百二、三拾年前の時が現物や資料から遡れる一番古い文様出現のころである。(九代家重)

然し、アイヌの人たちは、7世紀(655)大和朝廷に内属したり、阿倍比羅夫に討伐される以前より存在していたとすればユーカラそのものも古く、また、縄文や殷や周の饕餮文などの類似性が確かめられるようになれば、更らに遡り得ることも考えられる。

地域的には、八幡一郎氏はアイヌ文様全体の感じは北東アジアの比較的新しい文化をもっていると述べられ、Symmetricalな渦巻文様は黒竜江河口のGoldi族の中心的なモチーフが採り入れられているし、また他の文様には明らかに日本からの文様が入っているといわれている。アイヌの人たちの存在が極めて古いものとし、現存するアイヌの文様が遡ってもせいぜい三、四百年前であるとするならば、その間、不明の期間が余りにも長すぎる。それで、次のようなことが考えられる。

1. アイヌの人たちが存在を示した、極めて古い時代から文様もあった。または、無かった。
2. 古い時代は毛皮衣やオヒョウダモなどで織った衣服であり、時として入手できた僅かの木綿片や糸で縁どり刺繍した。
3. 山丹交易などで得た錦などは晴衣などであり、上流階級の酋長やその一族でないとは着られなかった。
4. 木綿衣や糸などがかなり多く入手出来るようになった徳川中期から後期にかけて、文様の切伏せ刺繍が盛んになった。
5. 特に明治初年北海道開拓使がおかれ、北海道の開拓が進められると内地から赴住してきた官吏などの土産物の一つとして衣服の作製が盛んになり従ってアツシ文様が盛んになり、文様も派手に豪華となった。

と見る。従って文様はアイヌ上流社会の人たちが身につける蝦夷錦など晴衣についている文様と考えた。

外人が言う薔薇形の文様というのは、この文様を意味し、十字形文様は Moreu で文様構成の時生ずる間隙を埋めたり、連繋したりするとき生ずる幾何学的図形の錯視と考えられる。前述のNegativeとPositiveの関係である。いずれにしても、現存の Moreu とか Aiushi が主体であったと考えられ、それ以外の文様は特殊な階級の人たちの文様ではないだろうかと思う。

色彩としては「アイヌの足跡」満岡伸一によれば、黒=柏の皮より渋をとり、これにて所要の原料を浸しその上、野地水の中に浸し、黒色とする。薄黒色のときは渋に浸さず、最初より野地水に浸す。

3. 4. 5 は別としても、1については、若し、アイヌ衣服の文様が未開的な原始的な立場で、その社会に特有な記号、または宗教的な意味を表現したものと考えるならばアイヌが存在した当初から、そのような意味をもった、例えば呪術的⁶⁾な文様があったわけで、もし無いとすれば、そのような意味をもたない単なる装飾的な意味しかもないことになる。

文様構成が前者ならば文様は極めて意味深いものをもつだろうし、後者ならば単純で種々雑多な好みに応じての構成であろう。

然しながら、アイヌの女性は代々、その子に砂場で文様のデザインしたものを反復教習させると聞いているし、背中の文様構成など観察するとき単なる装飾とは考えにくい。文様が豪華で美しく、きらびやかになったのは、確かに徳川末期かもしれないが、その起源は極めて古い時代まで遡らなければならないと考えられる。

2. アイヌ衣服の文様構成

・アイヌの衣類材料と衣服の分類

前述のように古い時代の衣服は自然物応用の裘であって羽毛や皮、また葦のようなものを僅かに綴じつけ縫いあわせたものであり、これと並行して樹皮をその仮またはこれらの繊維や草維を組んだり、編んだりして着用した硬い着衣の時代を長期間経過して来たのである。現在、遺されているアイヌ衣服で文様の附されているのを纏めると第8図のようになる。

第8図 文様のあるアイヌ衣服の材料及び分類表

Letarpe	レタルペ	<ul style="list-style-type: none"> ・つるうめもどき・いらくさの繊維、白く、強く、上品である ・樺太アイヌが多く用いる ・大陸の民族の衣服文様に似たようなものが多い
Atsushi	アツシ	<ul style="list-style-type: none"> ・無地もの多い（いらくさで織った服を入れる人もある） ・文様は一般にアイウン文が多い ・おひょう（アイヌ名、オッピョウ、アツ）の若木の内皮のせんいで織る
(Rumpe)	ルウンペ	<ul style="list-style-type: none"> ・アツシに刺繍したもの（満岡伸一） ・イェチウス（白の紐を切伏せすること）をしないでチカルカルベのように刺繍したもの（鷹部屋）
		<ul style="list-style-type: none"> ・この名は虹田と白老にのこっているだけ（児玉） ・きれの少なかったころ、これを細く切って丁寧に切伏せ、木綿の外、絹をつかい赤、緑、青の切伏せ刺繍したもの
木綿衣		<ul style="list-style-type: none"> ・アツシの代りに木綿布を用いる。 ・切伏せ、刺繍は北海道アイヌのアツシに似る（児玉） ・チニンニップともいう
(Chikarkarpe)	チカルカルベ	<ul style="list-style-type: none"> ・羽織代用でなく上から帯をしめる ・カバラミップのように白布でなく、黒布（直線形）を切伏、刺繍 ・Kunne Chikara Karpe（黒布の切伏）（鷹部屋） ・Retara Chikar Karpe 白木綿の直、曲線の切伏（アイヌ芸術）
(Kapalamiipu)	カバラミップ	<ul style="list-style-type: none"> ・「美しい衣服」（薄い衣服より転）、儀式のときなど他の衣服の上にはおる打かけ用 ・大幅の白布の単位を貼りつけ、切り紙細工のように文様を浮き出させ、その上に刺繍したもの ・明治に入ってから盛んにつくられる（手数を省くため大きな白布から文様をきりとり貼りつけたものもある） ・他の地方のアイヌ「は日高アイヌのチカルカルベ」と呼んでいる ・大柄で派手、直線と曲線の文様
(chigir)	チヂリ	<ul style="list-style-type: none"> ・切伏をおかず、直接に布にししゅうしたもの ・唐草的文様が多い、ししゅうは鎖状（児玉） ・日高東部のアイヌ語「つづれ」より転化したものらしい、また、それは日本の「つづれ」でもある
(Mouru)	△ モウル	<ul style="list-style-type: none"> ・これは文様はない、小衣、女子がきるワンピース型、今は女子の下着 ・昔はアザランの皮をぬいあわせてつくる ・昔は平常着、儀式のときは、この上に厚司をはおる

この外、輸入の絹織物としてシャランベ (kosonde) があり、この中に打掛、陣習織（または十^ツ

徳) 山丹服または蝦夷錦⁷⁾ などがある。

即ち、文様が施されているものとして、次のようなものがみられる。

- 主として毛皮に施文したのものとしてオロッコ、ニクブソ (ギリヤーク) など。
- アツソ……これにはルウンベなどが入るかもしれない。
- 木綿衣……チカルカルベ、カバラミッソ、チヂリ (木綿衣はすべて内地から輸入したもの)。

この外、シャランベがあるが、これに刺繡したように思われるものがある。

◦ 文様の手法的分類

前述のようにアイヌ文様には男文様と女文様があるが、女文様は衣服などの平面的なものである。

女文様を手法的に分けると、

- | | |
|-----------------------|--|
| 1) 刺繡文 | イ 絡繡 (からみぬい) |
| | ロ 鎖繡 (くさりぬい) |
| Ikaraka or
Ohokara | その他多くあり、欧州刺繡の様相を示す (児玉) |
| 2) 切伏せ文様 | イ 比較的、大きい白布とか、大幅の白布を切地の上に置き、不要部分をきりぬいて、それを布地に縫いつけたもので曲線文が多く白布を多く入手出来るようになってからの作品が多い。即ち、比較的時代の新しい作品である。 |

3) 織込み文様

このうち、切伏せと刺繡による文様が多く、特にこの両方の組みあわせによって構成表現される文様が多く見られる。

◦ 構成的分類

- | | |
|----------|--------------------------|
| 1. 左右対称 | • Bilateral Symmetry |
| 2. 上下対称 | 位置を変えると(1)と同じ、 |
| 3. 右斜向対称 | 〃 |
| 4. 左斜向対称 | 〃 |
| 5. 逆対称 | • Radial Symmetry (放射対称) |
| | • 点対称の一種である。 |

このように多様な対称形が殆んどアイヌ文様の構成であり、asymmetrical なものは稀に見るだけである。

◦ 形体的分類

形体の基本的単位としては Moreu と Aiushi がアイヌ文様構成の主要部分であり、そのうち刺繡文の殆んどがアイウソ文様である。

この文様の基礎的単位の調査研究は曾って北大工学部教授の鷹部屋先生が「アイヌ服飾文様の研究」「アイヌ服飾紋様の起源に関する一考察」で金田一京助、杉山寿栄男先生は「アイヌ芸術」服装篇で、児玉先生は「アイヌ民族誌」上その外で発表されているが、私も函館、釧路、網走、旭川などの博物館などで約 300 例のアイヌ衣服について、その文様を調査した末、第 9 表のように纏めた。勿論これ以外に変形があり、また全く違った文様単位も認められているが、アイヌ衣服に見られる平均的アイヌ文様の単位体としてよいのではないかと思う。

◦ モレウの構成

9 図に見られるモレウのモは「静かなる」の意であり、レウは「曲っている」とのことである。

・アイウシとモレウでの文様構成

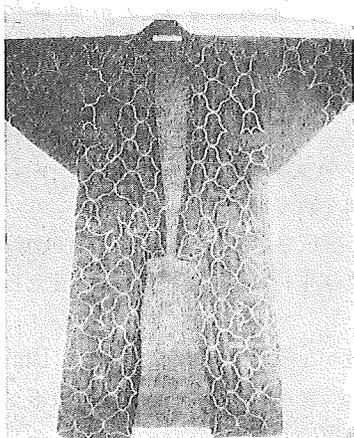
・さらにどの文様でもその上をアイウシの刺繍が連続文様として貫いている構成などがあるが、単独にモレウだけの文様構成のアイヌ衣服は、私の集めた資料でも見られないようである。

アイウシもモレウと同じく各種の変異を示しているが Symmetry としては平行移動及び平行移動の呼び返えしが裾、襟、袖口などに見られる。

アイウシは今迄の調査研究では一般に Soiun aiushi ソユンアイウシ (外側に葡のあるもの) と Aun aiushi (内側に葡のあるもの) アイウシの2つが基本形であって、その変形、発展が、モレウと同じく、いくつか見られる。これについては、東北工業大学の杉山寿氏が昭和43年、デザイン学会で「アイヌ民族の文様構成」と題して発表されているし、また、「アイヌ芸術」(金田一京助、杉山寿栄男氏)でも図版をのせて説明している。

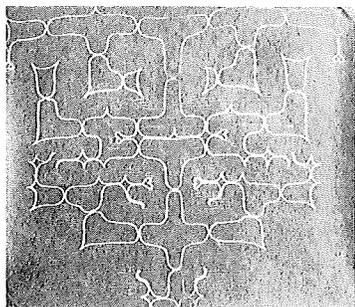
Chik noka (眼の象) はアイウシが展開されて大きな充填文様になると、その中心がシクノカになる。「アイヌ芸術」服装篇第5図の(3)がそれである。

北方原始民族間には結縛構成紋に由来して発達し、これが一種の綴じ目から出発した文様表現として、アイヌたちは後代これが眼を象ったように見えるところから「眼の象」といわれてきたと「アイヌ芸術」では説明している。アイウシを詳しく観察すると、第11図のように網目のように見える。(括弧文を2つ重ねあわせた形は恰度、漁網を拵げたように見える。) その外、若干のアイウシの変形(つりがね形やチューリップの花形)が見られる。然し主体は括弧のむかいあわせ形である。

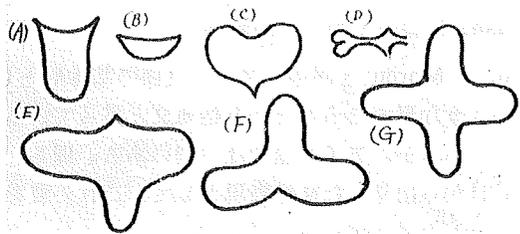


第11図 Mitsugiri 文様のアイヌ衣服 (筆者撮影)

これはアツンの背文様であるが、第13図のような括弧文の変形が見られてくる。即ち、網目のような線の連繋での形でなく、(第12図は未だ形でなく線として視認され意識される。) アイウシが展開されてシクノカとして表現されてくる。第11図では括弧文が向きあっている抱合形が主体で、逆つりがね型やチューリップ型は、背文様構成の中で単位文様で地を埋めていって余った地を埋めたり、Pattern の終末までの締めくくりの形で、その文様を使用されていたのが12図で明らかに「シクノカ」として13図のような面とりをしてくる。Moreu を上



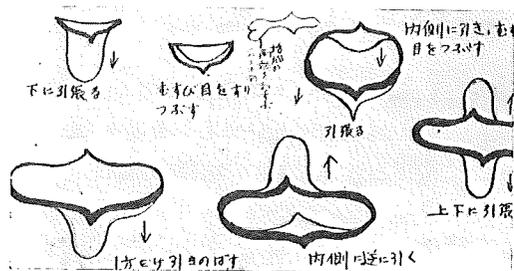
第12図 Mitsugiri 文様 (背中) (筆者撮影)



第13図 12図より採集の Aishi

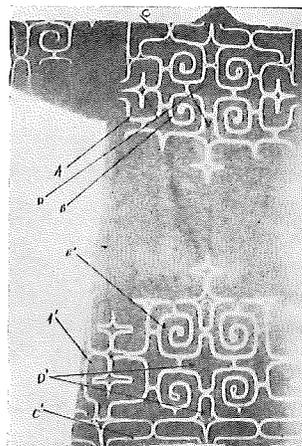
から縫い閉じていく段階では Ara Aiushi もあるが Aiushi だけで刺繍する段階では1つの Aiushi だけで構成することはみられなく、Uren Aiushi という形で Design されていく。

13図は逆つりがねの形であるが、これは Uren Aiushi の一方を縦に引伸し棘をすりつぶしたものの、このように引伸し、つぶし、また一方だけを引き伸ばし、他の一方をへこましたもの、両端を叩き中央部のみを引伸ばしたもの、真中をそのままにし、両端部を引っぱったもの、など現在のデザインで行なっている技法がそのままあてはまる。

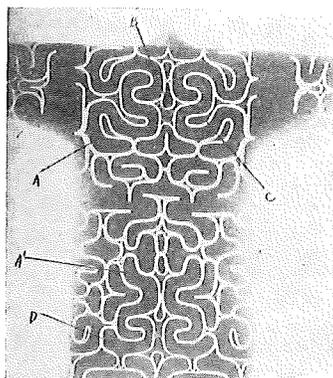


第14図 13図の説明図

第14図は Aiushi の原型を想定した図である。これがさらに進展すると第15図のようになり、上下の(C)(C')は未だ Aiushi の原型を保っているが、それがさらに伸びて、(B) (B') のような渦巻が出来てくる。4つの渦文(上・下8つ)はそれでも未だ図形をつくらないが、(A) (A') になってくると、明らかに Moreu 状の形を作りだしてくると共に、4つの渦文状のものや (A) (A') のような Moreu 状のものに囲まれた1つの形ができてくる、それが (D) のような十字形状、釣鐘状や菱形状のものであるが、これは作意的に作られたものでなく、飽迄も Negative なものとする。



第15図 ミチヂリミアイヌ衣服文様 (筆者撮影)



第16図 ミチヂリミアイヌ衣服文様 (筆者撮影)

16図になると、Aiushi の原型は縁辺部に残存して Pattern の起点と締めくり点となっている。15図の (A) (A') は16図の (A)(A') となって、次第に Moreu の形をつくっていくように見える。作意的でなかった15図 (D) は16図で作意的になり16図(D) (B)となり Positive なものから、どうしても形にならないものは(C)図となって Negative な形を作る。然しながら、これは線だけの構成であったのが7図の(A)(B)図になると、それが意識的に構成され、線の Aiushi が白片の面の Moreu になって切伏せされるようになる。

3. アイヌ文様発生の由来

色彩の派手やかなアイヌ文様もないわけではないが、アイヌ文様の中心点となるのは色でなく形である。曲線と曲線、直線と直線、曲線と直線のつくる形の調和や比例、そして配置構成の美しさである。これは Symmetry の対称性がその中心をなすことによって、厳正、神秘、荘厳などと言う心理的効果が生れる。

稀には不規則な文様も見られるが、全般的印象性では対称と言う原理が強烈である。

アイヌ文様の直線的図形のもは定木によって引いたわけではないから繩を直線的に置いたような程度の柔味もっているのに、その上からアイウシの刺繍があるから、剛直性が見られず、適度のやわらかさと硬さがあり、それが衣服全体の感じを非常に味わい深いものに行っているように感じられる。

アイヌ文様が単なる装飾だけか、また意味をもつものかは、今迄種々論争が見られる。

- ニール、ゴルドン、マンロー博士は菱の実をならべてアイウシの文様と見られるものを作った。
 - モレウについては巴、蛇、牙のように見たてた。
 - アンジュリスは十字形または薔薇の蕾の形に見た。
 - ラウファ (Laufer, the decoration Art of the Amur tribes) は括弧文はアムール地方の民族が雞の図案を多く使用している為、その伝統的な鶏の蹴爪文様という名称を与えた。
 - ワレンのステルンベルグは蛇の曲線化から出た文様だと言う。(アイヌ芸術服飾篇)
- この外、具象物からの便化と考える意見に、次のようなものがみられる。
- 曲線文 = 「Ehorka Wakka」 = 逆流の渦巻から便化。
 - 「Shivatnoka」 = S 形状 = 鍋釣の意。
 - 「Towa nokka」 = の字形に浅く巻かれた蕨手状のもの。
 - 「Koinoka」 = 波、青海波状。
 - 「Chep Kap noka」 = 鱗、鱗紋。
 - 旭川アイヌは蟹の抽象形と考える、また巴、三巴葵はアイヌの好みである。
- また波の文様の服を着ているとか、火が燃えている文様とアイヌの杉村婆さんがいっていると旭川道警の大塚氏が聞いている(これは日本人からきかれるのが多くなったので思いつきのような発言が多くなっている)。
- 「ふくろうの目」 = kamui chikap = 神の鳥、村を守護する神。

このように、アイヌ文様は具象から出発したと言う意見に対して、金田博士は「アイヌ芸術」で、また児玉博士、鷹部屋元北大教授もそれを否定している。即ち、鷹部屋先生は、古い時代、カパラミップを作製するのに細いリボン様の細い紐を切伏せて作っているが、この作り方は太古における繩文の遺物である。繩を結んで文様を描いたことは北海道の江別、江差等から出土する土器表面の文様から窺知することが出来るし、また古式による冠様の帽子において往時の慣習がその低、遺存されていると考えたが、繩文の文様は僅かにリボンの形体だけが残ったと考える。即ち、アイヌ衣服の文様を繩文の発達変形したものと考え、繩の有する渦文の性質から原始民が自然に考えつく曲線であるとした。繩文の渦文から原始民が自然に作った曲線であるというように考えた。(北方文化報告第6輯の意見)

金田一博士、児玉博士は東洋民族の得意とした、原始文様の出発点である結縛文様から教示されたと言う。金田一先生は結縛文様から繩文文様が出来、それが直線、曲線化されても、繩の文理から離れられないこと、亀ヶ岡式土器とアイヌの刺繍文は同一形式であること。この形式は日本内地に見られないで満洲服に見られること。即ち、(結縛文様→繩文文様これは満洲服から文様の影響)これに対し、児玉博士は渦巻の巻き方は繩文より浅いので形体的に異なる。しかし、満蒙、中国、黒竜江沿岸の諸族、ついで饕餮文など北方民族の結縛文と同じといわれる。鷹部屋先生はその後、(昭和39年)饕餮文の怪奇性からヒントを得、日本を通さず、直接北方から取り入れたのではないかと考えを変えている。(特に先生はアイヌ家屋の骨組構造が三脚式ケーン式で、これによってアイヌが狩獵を主としているため、北方からきた民族であることを肯定する重要資料であると述べている)。

三人の先生がアイヌ文様は北方民族からの影響が大であり、それは結縛文様から由来するといわれている。しかも鷹部屋先生は住居形式上からも北方からの民族であるといわれている点からも、出発が具象物であるとする前述の各氏の論は極めて危惧する点が多くなったと考える。アイヌの人たちが巴、波など名づけたのはアイヌ本来の文様表現の意味で名づけたのではなく、多く知人（和人や有名人など）によって類例を無理に押しつけられたと聞く。

若し、各種の写実文から、アイヌがそのモチーフを捉えて来たものであるならば、文様起源に各種の要素が必然的にあらわれてくるべきと考える。

神印、祖印、所有印のような信仰から表現されてきたものは実体が省略されて紋章、記号としてあらわれるが、これは文章省略の正しい軌道に沿っての経験がある。つまり形状のみから無理に付会したものに何等系統的価値があるわけではない。

既に各先生方の論で紹介したように、アイヌ文様が北方民族の結縛文から由来され、その綴じ目の線が文様の単位となってくるうちに曲線化され一種の稜をもった括弧文の単位をうみ、これが連続文や各種の複合形をつくっているうちにアイヌから抜くことの出来ない伝統性になったものとするならば、結縛文こそアイヌ文様の始源と考えざるを得ない。

但し、この場合明確に断定することは未だ未解決の問題が多くある現在少しく早急ではなからうか。なぜならば、次のような問題点が考えられるからである。○饗餐文との類似性 ○縄文土器文様（特に亀ヶ岡式土器文様）とのつながり。○日本における古代文様（特に蓮華文）との関連。○遠くは唐草文様から忍冬（Honeysuckle）への連繫。

勿論、黒竜江（Amur）を中心とする、その流域の北方諸民族の有する文様との関連は更らに深く追求されなければならない。以上、諸説を引用して述べたように、アイヌ文様は何時、何処で、どの様な形で生じたかは大体の推定はされても明確でない。

アイヌの人たちのことが人類形質学や考古学などでも明らかでない現在文様そのものの発生も明らかでないのが当然であろうが、その主体である Aiushi や Moreu の構成が次第に解きあかされていくにつれ、他の文様との関連も段々に解明されてくるとすればアイヌ文様の解明も次第に明らかになると考える。またここで資料や絵図で見た最も古いアイヌ文様と史的にあらわれているアイヌ人の居住し始めた時期との間の余りにも長い空白の期間（文様）をどのように埋めたらよいか、また徳川時代後半、つまり白布が多く入手出来るようになって以来、アイヌ文様の構成が豪華で派手になってきたと思われるが、果してそうなのかどうか。未だ解決されなければならない数多くの問題がある。

さて、一応、今迄、調査研究されてきた「アイヌ文様」全体について概括的に述べながら私見を加えて記してきたが、そのうちでもとくにアイヌ文様は北方民族の結縛文様から由来したのではないかという論はアイヌ文様の始源ということで極めて有力な意見とも考えるので、この点を関連文様と比較して一層研究、調査を進めたい。尚、次に私見であるが、数多くのアイヌ衣服を観察の結果、アイヌ文様の構成は Aiushi が基本形であり、Moreu も Aiushi から変形、発展して出来たのではないかということの一つの問題提起の形で出したことは、アイヌ文様の起源や構成の上で極めて重大な問題と考えるので、先の問題ともども、関連諸国や諸民族の文様と比較検討して更に調査研究を進めていきたい。

参考文献

- 村尾 元長 「あいぬ風俗略誌」
- 中目 覚 「樺太の土人」 学校教育38号

明治25年6月

大正5年12月

北教大
函館分校蔵

- | | | |
|--|-------------|--------|
| ○橋本 堯尚 「北海道史譜」 | 昭和5年7月 | |
| ○中目 覚 「樺太の話」 三省堂 | 大正6年6月 | |
| ○満岡 伸一 「アイヌの足跡」 | 昭和7年5月 | |
| ○鷹部屋福平 「アイヌ服飾紋様の起源に関する一考察」 北方文化研究報告19輯 | 昭和39年6月 | |
| ○鷹部屋福平 「アイヌ服飾紋様の研究」 北方文化研究報告6輯 | 昭和17年10月 | |
| ○北海道庁 「北海道旧土人概況」 | 大正15年10月 | |
| ○John Batchelor 「Ainu Fireside stories」 | 1892 | |
| ○越崎 宗一 「アイヌ絵」 札幌中西写真製版 | (非売) | |
| ○金田一京助 「アイヌの研究」 八州書房 | 昭和20年6月 | |
| ○長谷部言人 「日本人の祖先」 小学館 | 大正14年2月 | |
| ○千徳太郎治 「樺太アイヌ叢話」 市光堂 | 昭和31年7月 | |
| ○鳥居 竜蔵 「千島アイヌ」 | 昭和4年8月 | |
| ○岡上 麟蔵 「東韃紀行」 文化5年 中松田伝十郎
間宮林蔵(話) 村上貞助(記) 北斗社 | 明治36年7月 | |
| ○金田一京助
杉山寿栄男 「アイヌ芸術」 服装篇 | 明治44年5月 | |
| ○高倉新一郎 「蝦夷風俗画について」 北方文化研究報告第8輯 | 昭和16年 | |
| ○新井 白石 「蝦夷誌」 | 昭和23年3月 | |
| ○アイヌ文化保存対策協議会編 「アイヌ民族誌」上 第一法規出版 K. K. | 1720 (享保5年) | |
| ○泉 靖一編 「アイヌの世界」 鹿島研究所出版会 | 昭和44年3月 | |
| ○渡辺 素舟 「東洋図案文化史の研究」 富山房 | 昭和43年9月 | |
| ○洞 富雄 「樺太史研究」 新樹社 | 昭和26年3月 | |
| ○小杉 一雄 「日本の文様」 社会思想社 | 昭和31年3月 | |
| ○万 富三 「図案構成とその応用」 宝文館 | 昭和44年6月 | |
| ○新山 質 (葛西因是ナリ) 「蝦夷風土記」 寛政9年新井質著(朱書)
朱書, 写本 | 大正14年9月 | 著者蔵 |
| ○古代史談話会 「蝦夷」 古代史研究第二集 朝倉書房 | 1797 | 著者, 仮蔵 |
| ○最上 徳内 「蝦夷草紙」 | 昭和31年5月 | |
| ○坂倉源右衛門 「蝦夷随筆」 | 1786 | |
| | 1738 | 他 |

参考資料

- 北海道大学, 函館, 旭川, 網走, 苫小牧, 釧路などの博物館所蔵の「アイヌ衣服」より撮影した写真, スライドなど約300点.
- 註 1) チミップ Timipu またはアミップ Amipu と一般的にいわれているが, 蝦夷風土記では衣服は Siambe といい, Sharambe は日本衣と訳す.
- 2) 小玉貞良は竜門斎と号し, 松前生まれの画家, 宝暦年間活躍したと思われる. 狩野朋信と見る人もある北大蔵の「蝦夷国風図絵」や函館図書館蔵の同図などは, この貞良の同一系統に属するものと考えられる. 伝写の主なるものとして安永9年(1777)田雪江亭, 天明3年(1783)藤芝川, 文久3年保栄静文化4年(1807)湯浅景福などの絵が見られる.
- 3) この図はアイヌの酋長らしき人物2人とその家族らしい母と子, 及び荷を背負った従者のアイヌを画いた掛軸で多分松前藩主に謁見(ウエマム)に出掛けるところの図と思う. 筆法からして明らかに貞良か, その一門のもの筆である. 泉靖一編「アイヌの世界」135図では母と子だけを抜き, 写しているが, 作者不詳年代1800~前ばん~中ばころという解説は従って肯定できない. 北大図書館蔵.
- 4) 註亀甲文については種々な見かたがあると思うが小杉一雄氏は(日本の文様 p.123~p.125)の中で「亀甲文については文字を負う亀と長寿の筆頭としての亀がある. 長寿の亀も矢張り文字を背負う亀から来る. 我が邦では中国におけるつるとかめの説話をもとになって, 近世には亀甲文が氾濫した」と述べられている.
- 5) 蝦夷誌は我が国最初の蝦夷地誌, 享保5年(1720)の序文をもつ新井白石の著書である. 種々の資料によって作られたが, 松前家に質問して得た「御老中へ正徳5年松前志摩守より差出候書付」「追而差出候書付」によったものと思われる. (アイヌ民族誌 p.27)
- 6) 呪術(Magic)の為に用いられるものは護符(Amulet)(防御を主とするもの)呪符(Talisman)(攻撃的目的)の2つに分類される. ……(Principles of visual Communication p.14 視覚デザインの原理・高橋正人)
- 7) 山丹服を満洲ではマンチュウ, コソントといい, 山丹交易での満洲服, 山丹綴錦のように豪華なのもある(児玉), 明服に似ている(鷹部屋). など述べられているが, 山丹錦, 蝦夷錦は同義で中国の明服(官服など)錦織の豪華なものもあった. 樺太史研究・洞富雄 p.73には交易品としての山丹服の明細が出ている.